

筑波大学日本文学会会報

第14号

1990年 2月

| | |
|-------------------|----|
| 谷脇先生お元気で……桑原博史 | 一 |
| 悲しき性——おかしい自分のこと—— | |
| ……谷脇理史 | 三 |
| 日本文学会だより | 五 |
| 研究室だより | 六 |
| 教官新刊紹介 | 十 |
| 卒業生だより | 十一 |
| 日本文学会教官学生名簿 | 十六 |

谷脇先生お元気で

桑 原 博 史

谷脇理史先生が、平成二年（一九九〇）四月一日から早稲田大学文学部にお帰りになることになった。母校でなかったら私どもも引きとめしたし、先生もお動きにならなかったと思う。もう何年も前からの話で、これ以上先生に御迷惑をかけるわけに行かず、私どもとしては泣く泣くお別れすることにした。

先生が跡見女子大学から筑波大学にこられたのは、昭和五十一年（一九七六）八月一日のことである。その前年から私は、創設もない国文学研究資料館の調査員をしていて、——これは創設もない資料館としてはやむを得なかったのだろうが、地方の文献資料を記録として集めるのに地方図書館に対し冷たいと思える方法だったので、調査員の会議でつい私が余計な発言をした。その当時おられた資料館の教授の方が、これまた非常に官僚的な答え方で私をたしなめた。日頃その人の進歩的な言辞にみちみちた論文に啓発されていた私は、すこぶる失望したが、別に議論になるようなことではないのでそれだけで事は終わったのである。

しかしうれしいことに帰り道、その教授と専門領域を同じうする近世文学の研究者で調査員となっていた人たちが、さりげなく私を慰めてくれるかのように、喫茶店で歓談する一時を持ってくれた。私の四〇代前半のことで、その当時は初対面の研究者同士で

も、こういう交わりができたことをなつかしく思う。その何人かをすっかりおぼえていれば私もたいした者だが、鮮明なのは、富士昭雄、谷脇理史のお二人だけである。お二人がきわだった美男子だったからであろう。

まもなく筑波大学で近世文学担当の教官が必要になった時、どの先生も近世文学の専門家を知らなくて途方にくれる中で、私が谷脇先生の名を自信をもって進言したのは、もちろん論文のすばらしさもあるが、それ以上に、このたった一回の触れ合いを通じて、先生の人柄の暖かさを刻みこまれていたからであった。

しかもこれまた偶然のいたずらで、着任の辞令を受けとりに暑いさ中、谷脇先生が我孫子の駅のベンチで列車を待っている時、私が通りかかった。先生がどうぞよろしくとおっしゃる間、私は、このおだやかな紳士を、創設まもなく荒々しい声のとびかう教授会の中に押しこむことに、耐えられぬ思いがした。はたして来ていただいて先生のためによかったのかどうか、などと、先生をばげましもせず、あらぬ事を口ばした私自身を、今も情けない男だと反省している。

しかし先生は、実にみごとに溶けこんで下さった。大小さまざまな会議を通じて、所属する文芸言語学系、比較文化学類はもとより、他学系他学類の先生がたと、短期間でこれほど多くの人たちになじみ、かつ讃めたたえられた先生は、いないのではあるまいか。今は他大学に転出した或る事務官が、企画調査室の仕事を通じて、谷脇先生がいかによい人物であるかを、適確な事例をあげて伝えてくれたこともある。ついには、大学の今後はどうあるべきかというシンポジウムの講師となったり、中国に派遣されたり、ほがらかな態度で楽々と何事もおつとめになった。

病弱な私は、定年以前にかりに退職するようなことがあっても、なんの心配もないと、すっかり安心してしまっていた。もとより、よき飲み仲間でもある平岡先生にも、奥野先生以下の先生がたにも院生以下の学生にも、今回のお別れは大打撃である。しかし谷脇先生を安心させるためにも、ぜひ若い先生がた、学生諸君は、充分に精進して、大きく成長していただきたいと思う。それが先生に対するはなむけ、などという、あまりに絞切り型ではある。大変な危機が来たのだという認識は、持ってもらいたいのである。

かつては阪神タイガースの中西投手を思わせた谷脇先生のお姿（お顔ではない）が、五〇代にはいられて、やや容積を増されたことは気になるが、しかし今年度の院生オリエンテーションで、あと一五年は充分に勉強できるとおっしゃった、そのお言葉通り、お元気で、そのお名前をあちこちで耳や目にするのを、私どもの楽しみとしたい。

先生の一番充実していた時季、筑波で過ごされたこと、ほんとうにありがとうございました。

悲しき性——おかしい自分のこと——

谷 脇 理 史

本来そのような性向を持っていたのか、あるいは、研究対象とする西鶴の作品や戯作類に自ずと感化されてそうなってしまったのか、その辺の所ははっきりしないが、私は、旅行をしていても、風景や名所・旧蹟などを見て感銘を受けたり感動したり、といったことがほとんどない。どうしても当世の世態・人情・風俗の方にのみ関心を持ち、高雅・風雅と云った世界とは無縁な所をうろつきまわるだけで終ってしまうのである。市場をのぞいたり、路地裏を歩いたり、一杯飲み屋に腰をかけたり、思えば俗であり、野暮な話ではある。そして、そんな旅が終わった後では、

一年、松島にゆきて、はじめの程は横手を打ち、「見せばやここ、歌人・詩人に」と思ひしに、明暮詠めて後は、千島も磯くさく、末の松山の浪も耳にかしましく、塩竈の桜も見ずに散らし、金花山の雪のあけぼのに長寝、小島の月の夕もなにも思はず、入江なる白黒の玉を拾ひて、子ども相手に六つむさし、気をつくす事にもなりぬ。

という『好色一代女』巻三の一の一節を思い出したりして、やっぱり私は西鶴派なんだなあと俗であることに居直り、時に嘆息することにもなる。松島に感動し高館に涙する芭蕉が羨しくないこともないが、下賤で俗なるものを好む悲しい性は如何ともしがたいのである。

これは、昨年四ヶ月程、中国に出かけていた時にも同じであった。広大な自然、種々の名所・古蹟を人並に見ることは見たが、さしたる感銘を覚えることもなかった。丁寧に見れば何日もかかるとも云われる広大な故宮博物院を二時間で駆け抜け、正午にはもはや、繁華街のお世辞にもきれいとは云えぬ焼売屋でビールを傾け、裏通りを歩いて琉璃廠の古籍店をうろつくといった、ある休日の私の過

し方などは、中国で同僚となった先生方をあきれたものようであった。確かにこれでは、中国まで出かけるのも、神田の裏町に出没するのも、さしたる変りはないことになる。（もともと、勝手気ままに過す時間に恵まれた中国での生活は、私にとって、近來になく楽しいものであり、又の機会を熱望しているのではあるが……）。

もちろん、これまでもそんな自らの偏癖を反省し、雅かな世界を志向する努力を試みたこともなかったわけではない。が、駄目なのである。一見高雅な世界を覗いて見ても、見えてくるのは俗情のみ。「源氏」を読んで面白がりはしても、その雅かな情趣にひたり込むことなどできないのである。

私は、本を読みながら、時々ヘッヘッへ、あるいはウッシッシと賤しい笑い声をたてるということ、家の者の悪評をかつている。「源氏」や『伊勢』を読んでも、高尚な論文を読んでも、時に思わずウッシッシということになってしまふようなのである。これをしも溺れ込むことを感覚的に嫌う性向と称しうれば一見恰好がいいのだが、実は感性の鈍なるのみというに過ぎないことは明らかである。時に酒に狂い時に俗なるものを喜んで、燃えない、乗らない不感症、思えば浮世の楽しみを何分の一かしか味うことのできぬ損な性向というものである。

が、もはや私も齢五十、こんな自分であることを自覚しつつ、俗な世界のみをうろくしているうちに、天命を知る年になってしまった。俗に居直ることが何の天命ぞやとの感、なきにしもあらずだが、さればとて今さら自らの性向を改めることは出来そうにない。「好いたこととして遊ぶにしかじ」と居直り、所詮研究などというものも又「夢幻の戯言なり」と、宗因風に斜に構えて、ボチボチと俗な世界にかかわり続けて行く以外にはなさそうである。

小生、種々の事情あり、来年度から転任致すことになってしまいました。が、あの世に行くわけでもありませんので、右のごとくいささかならずおかしな人間ではありますが、筑波大学日本文学会の一会員として、今後ともよろしくお願い致します。